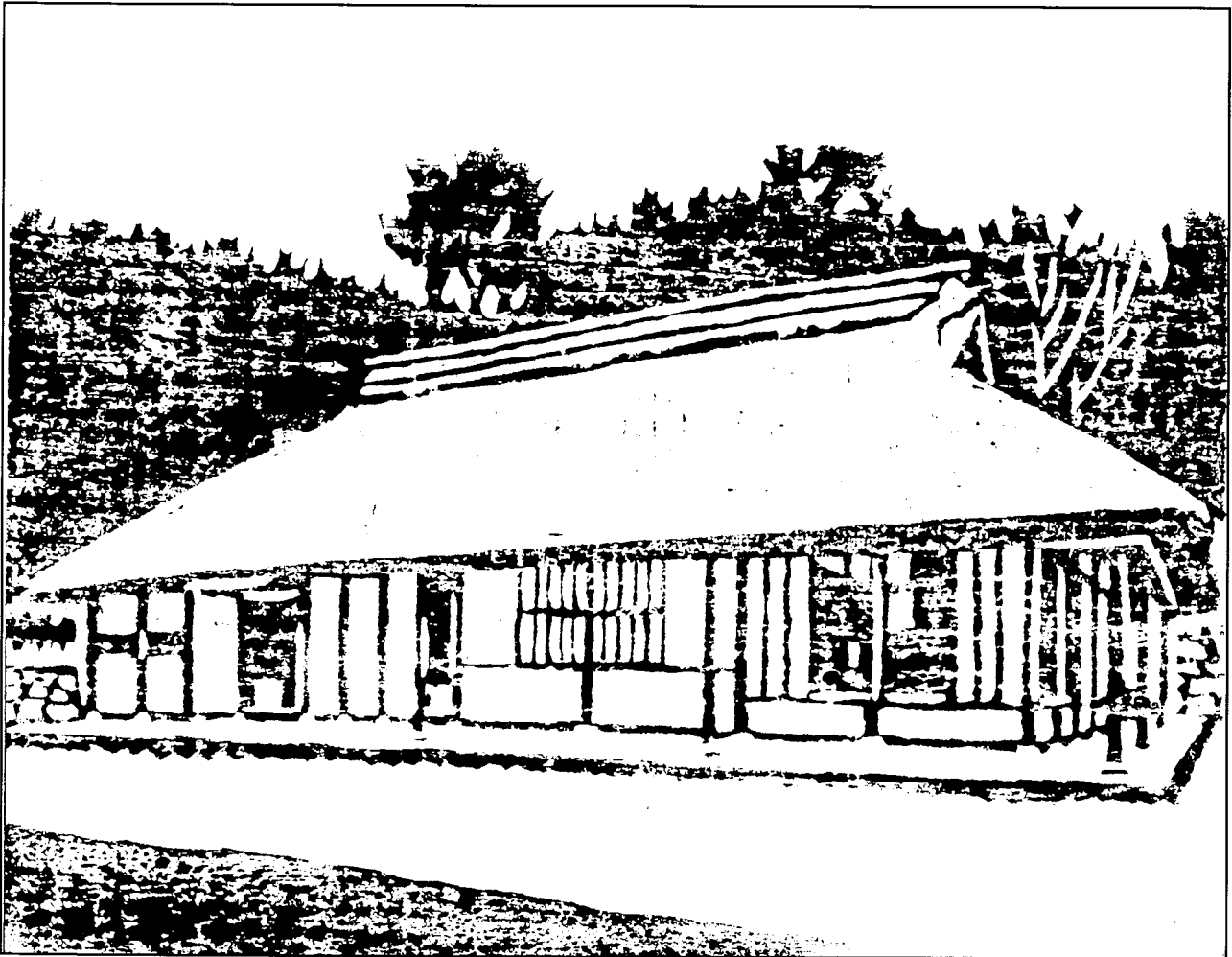


# 日本民家園だより

第53号

平成15年8月1日

編集・発行 川崎市立日本民家園



## 日本民家園叢書3,4の発行

本年3月に、民家園では民家園叢書3と4を  
あいついで発行しました。

# 多摩丘陵の農家 1955年細山 日本民家園の発端

関口 欣也 著

『竈の改良などよりも屋根の葺変えが大変だ』

麻生区金程・細山は、東西に細長い川崎市の西北部に位置し、その北で東京都稲城市に接している。この地域は、市域でも多摩丘陵の高位面に属し、開析が進み樹枝状に谷戸が切れ込んでいる。今は宅地化が進み、谷戸の一部は埋め立てられもしており、かつての典型的な多摩丘陵の面影を探すのも困難であるが、つい数十年前は、谷戸部に水田、緩斜面に畑、丘陵頂部や斜面はナラ類などのいわゆる雑木に覆われ、高木といえば松の目立つ景観であった。約50年前の1955年(昭和30年)、夏の暑さも厭わず、一人の青年が、金程・細山の農家を尋ね歩き、92軒の農家について詳細なアンケート調査を行い、さらに22軒の農家の平面図や配置図を作成した。その調査の目的は、農村住居に於ける住意識の把握(本書第一部「村人の住い方と希望」と作業場の分離過程の歴史的な把握(本書第二部「だいどころとこなしべや」)であった。当時、農村住居においては、居住空間と作業空間の分離が全国的に進行中であり、そこに今後の農村住居の展望を開く鍵があるとの確信が青年にはあった。若き建築学徒であり、自身も金程・細山にほど近い農家出身であるこの青年の胸の内には、農地改革よりまだ約10年しか経たず、男女一様の重労働からなる農作業と素朴な住生活の改善への意欲があったのである。この調査は、青年、関口欣也氏の横浜国立大学工学部建築学科卒業研究として行われたものであった。

本書は、現横浜国立大名誉教授である関口欣也氏の卒業論文「川崎市細山調査報告―農民の住意識の階層性と作業空間の分離過程について―」に、エピローグとして1.伊藤家住宅の重要文化財指定―日本民家園の発端―、調査時から約半世紀経過した2.細山の現況 2002年、金程・細山との比較として3.東方五反田(多摩区生田)の一農家の事例を関口欣也氏が新たに書き起こしたもので構成されている。この卒業論文に関し、指導にあたった林 豪蔵横浜国立大学講師(当時)は、「所謂公式な、又は習慣的な農村調査の方法から脱して、汗と脚で描き出したものだけに迫力がある。・・・異色ある論文。・・・建築家ならではの点がうかがわれて、・・・他の分野の人では、ここまで手が届かぬ・・・」と高く評価されている。迫力ある調査報告であること、他の追従を許さないユニークさといった点は、現在読まれても変わらぬことと思われる。本書を手にとられた読者の目には、金程・細山地区の昭和30年代の姿が、はっきりと浮かび、現在の瀟洒な住宅が建ち並ぶ金程・細山地区との違いに驚かされるのではないだろうか。たかだか半世紀の間に、如何に変貌を遂げたか、この変貌は金程・細山だけでなく、多くの地域でも見られたものであろう。例えば、水の問題が報告されている。「細山は丘陵地であるため、水不足の傾向があり、井戸が遠く、深い家が多い。何回も井戸を掘りなおして三回もくり返したために『井戸貧乏になってしまった』『皆台所の竈ばかり気を取られているけれども、本当に女手を助けるのは竈よりも井戸なので、家では水道を引いた。』

あるいは屋根替の問題がある。既に屋根講は昭和初年以降消滅し、戦争によりかつての茅場は茅畠に変わり、ある家の主人の「殆ど毎年のように莫大な金が屋根に使われるため、屋根貧乏になってしまう。もう藁屋根を見るのも沢山だ」という言葉の背景にはひしひしと押し寄せる農村の変化を見取ることができる。

半世紀の変貌は、そこに住む人々にとっては激動とでも呼べるのではないか、この激動を生き抜いた人々に敬意を禁じえない。

本書の成果は、上記の農村調査に留まらない。それは、金程の伊藤家住宅の発見である。その詳細はエピローグ1に詳しいが、1955年卒業論文提出後、伊藤家住宅の重要性は、建築史家の知られることとなり、大岡實博士を中心とする神奈川県全体の近世民家の様式と編年の研究に発展し、文化庁はこの研究成果に基づいて民家の重要文化財指定を進め、伊藤家住宅は神奈川県下での第一号としての指定を昭和39年(1964年)に受けることとなった。一方、川崎市でも伊藤家住宅の移築保存と、民家博物館建設の声が次第に高まり、昭和39年11月から移築修理工事が実施され、現在の民家園となる。このような経過から、本書の副題は、日本民家園の発端となった次第である。

## 日本民家園叢書4

# 日本民家園の雪囲い

監修 上野勝久・野呂瀬正男

編集 大野敏・小坂広志・砂川康子・増渕和夫

民家園では、移築を行った民家に、来園者の方々に民家をより知っていただくため、その家にまつわる生活用具の展示、並びに生活慣習の復原実施を行っている。平成4年からは冬季に合掌造りの山田家で、毎年雪囲い展示を行い、季節感ある展示として好評を得ている。本書は、この雪囲い展示のために行われた調査(五箇山・白川地域、山形県朝日村地域)結果に基づくものである。35ページの小冊子であるが、全国的にも、雪囲いの詳しい解説は少ない中で、豊富なイラスト、写真で豪雪地帯の雪囲いの実態が解説されている。

販売のご案内：日本民家園本館券売所でお求めください。

日本民家園叢書3 多摩丘陵の農家 1955年細山 日本民家園の発端

関口欣也著 定価 1000円

日本民家園叢書4 日本民家園の雪囲い

監修 上野勝久・野呂瀬正男 編集 大野敏・小坂広志・砂川康子・増渕和夫 定価 200円

## 民家園ウォッチング ④

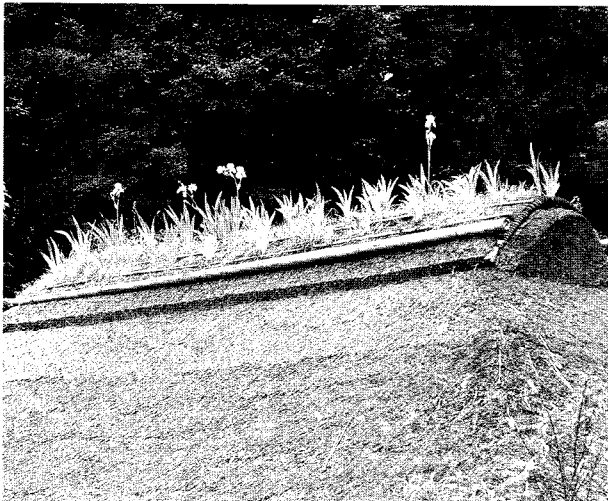
### 芝 棟 (しばむね)

茅葺き屋根は、軒先(下の方)から茅束を積み上げ固定し、ずらしながら重ねて上方に葺きあげていきます。頂上まで葺き上げると茅を重ね合わせ、頂部に茅束をのせて棟をつります。この棟を押さえる方法に土をのせて植物を植えた「芝棟」と呼ばれるものがあります。

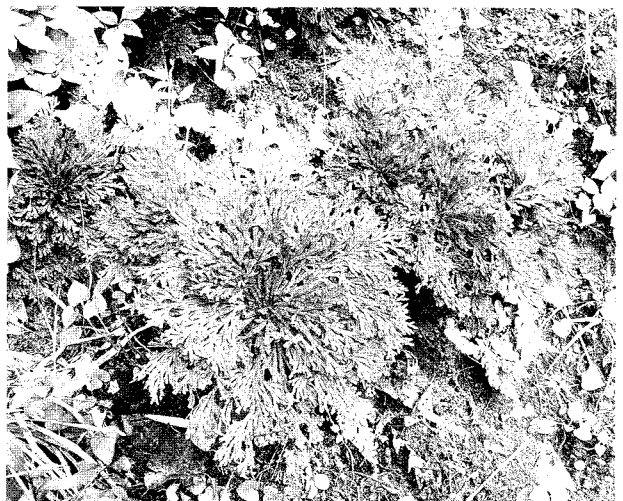
広瀬家住宅を見上げると、屋根の頂部にみえるごつごつした塊は「イワヒバ(イワヒバ科)」という植物です。園内では、佐地家供待の横にある休憩所ベンチ後ろの斜面にも植えられていて近くで見ることができます。

また、清宮家住宅の芝棟には「イチハツ(アヤメ科)」などが植えられていて、5月頃には美しい花が咲きます。

当園にある古民家だけでも、様々な棟押さえの方法が見られますので、棟に注目しながら見学してみるのはいかがでしょうか。



清宮家の芝棟



イワヒバ

# 平成15年 秋の催物案内

## お茶席の会 (秋)

10月5日(日)・11月9日(日)

古民家を鑑賞しながら抹茶をお楽しみください。

11:00～ 佐々木家にて

先着 100名

一服 300円(和菓子付)

(入園料別)

協力 10/5 所社中

11/9 内田社中

県立川崎北高等学校茶道部



10月11月は「日本民家園祭」です。

11月3日は無料開園日となります。

## 船越の舞台・民俗芸能公演

11月3日(月・祝)

市内の民俗芸能をご覧いただけます。

13:00～ 船越の舞台にて

料金 無料 当日参加自由

## 実演「大工仕事」と 体験「こども大工入門」

10月19日(日)

・実演「大工仕事」

昔の大工道具チョーナ削りなどの実演が見学できます。

・体験「こども大工入門」

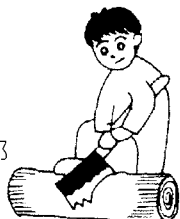
ノコギリやカンナなど大工道具を使う子ども向けの体験と工作教室です。

11:00～15:00 作田家にて

料金 無料(入園料別)

当日参加自由

協力 神奈川土建川崎多摩支部



## 「むかし」体験

11月3日(月・祝)

わら民具着用やはたおり体験と子ども向け竹馬、輪投げなどのコーナーです。

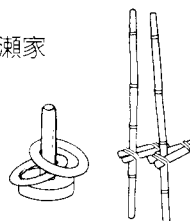
11:00～15:00 太田家・広瀬家

料金 無料

当日参加自由

協力 民具製作技術保存会

※天候等で変更になることがあります。



## 邦楽の会

10月13日(月・祝)

協力 川崎邦楽友の会

## 講座「古民家の話—信越の村」

古民家の移築・保存の仕事をしてきた元職員による当時の話を交えた古民家の解説と園内見学を行うシリーズ

今回は、白川郷・五箇山の合掌造り民家などのある「信越の村」エリアにスポットをあてています。

【日時】 10月4日～10月18日(各土曜3回連続) 13:30～15:30

【講師】 野呂瀬正男(文化財建築技師)  
大野 敏(横浜国立大学助教授)

【会場】 民家園内 原家にて

【受講料】 2000円 【定員】 30人

【お申込】 往復ハガキ(1人1枚)に「住所・氏名・電話・講座名」を記入のうえお申し込みください。

9/22(月)締め切り必着。

